

# 眞 生

第 三 卷 三 月 號

◆眞實の宗教は自分で勝手に作らんとして作られるものでもなく、又自分で勝手に信せんとして信せられるものでもない。そこには作らんとして作ること能はず而も信せざらんとして信せずにはあらぬものがある。

◆されば此の間地獄がどうの極樂がどうのと色々理窟で説明し得られるものではない。今現に救はれなければ、刻も生きてゐるこゝのできない此のやるせなき自分をヒシヒシと抱きしめ給ふ如來の大悲に直接するところのものである。

◆そこには只如來への祈りのみである、而し眞實の宗教は人から聞いたり或は本を讀んだりして得られる所のものではない、それは一つの概念に過ぎぬ、概念は一の想像である、而て單なる想像は決して眞實のものではない。

◆眞實の宗教は即ち體驗の宗教である。體驗なき人の宗教、決して眞實の宗教でない。而て體驗の宗教は自に其の人の自覺である。自覺なき宗教は眞實の宗教でも又體驗の宗教でもない。

◆念佛のいはれを聞いても之が信せられないでは聞ても聞かぬも同然である。又念佛を信じても其の信が如來に南無するに至らねば信も信とは云へぬのである。信即行、行即信の念佛こそ即ち其の人に於ける所の念佛體驗の宗教であり、それこそ其の人に於ける眞實念佛の宗教である。(念)

目次

◆火宅	尅子
◆稱名念佛成就(二)	土屋觀道
◆懺悔錄(廿一)	演阿彌
◆不定の眞理(一)	中野善英
◆往生の意味に就て	小要利吉
◆法の道	念阿彌
◆報告	

▽夜が明けた事を知らずに寝てゐても陽は昇つて居る、日が暮れたと思つて居ても太ももは一瞬も我々の體から離れずに見ぬ光、温みとなつて護つて呉れる、一瞬でもあの太陽が我々から全く懸絶し、なら草も人も血液も一度に凍へて死んであらう。あの太陽は赤兒にも虫にも等しく、生命の親である。

▽佛は我等が知ると謙らぬとに係らず、常に我等を闇冥の裡にソツト下り抱いて居て下さる。

▽我々は大きくならうと思はるが、陽が出たり没したり巡り巡つて大きくならうと思はるが、我々自分ながら分りなかつた事、なつた事を常に驚く、本當、我々の力丈けで大きくなつた事、なつた事、得る人が何處にあるか、自分丈けで爲れる事は一つも無い。

▽個々の方向を取て居り乍らそれが大きい方向に向けられて居る、自轉の儘が公轉をなし、又公轉のまゝが太陽系と共に一大方向に向て居る。總て、相対する小矛盾の儘が大調和を造つて居るのであり、大調和の心が小矛盾となつて現はれて居るのである。

▽山の崩れるのも大雨の降るのも大平均を來すが爲めの安全辨である、此無限に動いて行く力、佛に醒めた者には何うして其支配の手から遁れる事が出來やう、佛の力に由てこそ無限の生命を築いて行くのである。

▽我々は餘りに小兒に自己ばかりを窺いてはならぬ、自己が見なければならぬ。(尅)

火

宅

人間の一生は恰も火宅にゐる様だ、表口を消してゐる間に裏口へ火が廻る、コレハと裏口へ走つて行つて居る間に屋根が焼け落ちた。彼方へ飛び廻り、こちらへ駆け巡つてゐる間に、家ぐるみが皆焼かれて了ふのだ。

その中で或る者は何を出さうと夢中でゐる。又或る者はもう仕うせ駄目だ皆んな来いと親子供を集めてせめてもの安慰に浸つてゐる。又或る者は駄目だとは言ひ乍ら何んとかして遁れ路は無いものかと、靜かに考慮をめぐらして居る。或る者はそれにも係らず、火も亦涼しと肅容として死を待つてゐる。けれども昔焼かれてゆくのだ。

此場合たゞ一人啞の下男が庭口でせせと大梯子を井戸の中へ降して居る、彼は梯子を傳つて井戸の中で跪んでゐるつもりらしい。

「死」が來るからと云て座禪をして待つて居る人が有たら本當の禪者では無からう、死が來たら組伏せて遣らうと待構へて居る人は既に死に負けて居る人だ。常に常に死を乗り越へて進んで行て居るものでなくては本當の生者では無い。

井戸の中で死んだ下男は恐らくは疊の上で威張つて死んだ野狐禪者よりも樂に死んだらう、彼には理窟が無い、最後まで最善を盡した悦びが有つた。

火事場では智者らしい智者は皆焼かれる、慾者らしい慾者は皆殺される、それは皆智慧に引張られ慾に引張られて、切り抜けやうとするからだ、時實に影響の無い智慧は單なる概念であつて力でない。

聞信一念即往生といふも、たい知つた丈けの信ではない、行信證と順序するところ、眞に彌陀行に信順し本願に習ふ者でなくては味達されぬ、「智慧第一」の法然が智慧も捨てられた所以はそれである。

念佛攝取と聞知した丈では信では無い、攝取不捨の念佛に成り切るどころに初めて信が得られたのである。井戸に梯子を降しかけた啞には救ひがある、そして煙にまかれて水の中へドボンと焼け落ちた時にも救がある。救を以て始終したのは梯子に手をかけた啞の幸びである。(尅子)

## 稱名念佛に就て(二)

(人格主義的淨土教の五)

土屋觀道

次に南無阿彌陀佛と申すばかりで往生ができるとの點に對する疑いである。而て之に對する世人の疑難は、

第一、凡そ吾人の行動に對して如何なる罪人も又如何なる愚な人々も、只口に南無阿彌陀佛と申した許りで悉く其の人が救はるといふことは如何にも世間の道理に合はないことである。

第二、又之を通佛敎の立場から見ても、六度萬行、廢惡進善は諸佛の通戒である。然に如何なる罪人も愚人も單に只南無阿彌陀佛と申したばかりで一切の罪障も除こり悉く往生解脱が得るならば難行苦行の菩薩の聖行は徒らことになるではないか。

第三、從て若し他力易行の方法が聖道門の外にあるならば何で之等の諸佛菩薩が難行苦行をせられる理があらう、されば此の諸佛菩薩の難行苦行のある限り、他力念佛などのあることはないのである。

第四、又凡そ此の世に於て造つたありとしあらゆる罪惡も只一口の稱名念佛で之等の罪障が除こり、直に如來の淨土に往生ができるものならば、何も此の世に於ていやな思までして善事を行ふ必要はない、從て世は我々、に自分の好きなことのみをして行けばよいのであつて、臨終の間ぎはに只念佛して往生すればよいのでないか。

第五、之では世人は一人として自ら善行を勵むものにてはなくなるであらう。

第六、而て此の世は全く利己主義の人のみとなつて、直に鬪争闇黒の世界となり終るであらう。

第七、從て因果發無として佛敎の教理にも反くものである」と。

乍然、他力淨土の本願念佛は斯る論者の如き批難攻撃を受く可き無價值低級な宗教そのものではないのである。而て私も嘗ては斯る心を以てかゝる批難を念佛に向つて放つた時代もあるがそれは見る人の大なる見解の相違であつて、單に之丈けの見解を以て此の口稱の念佛を難するならば、夫は寧ろ自分の見解の如何に低級にして又下劣なるかを聽衆の面前に表白するに過ぎないものである。而て念佛は決して之等の批難によつて寸毫も毀損せられるものではないのである。從て之を善導大師の敎説に見るも、亦宗祖法然上人の念佛義に見るも決してかゝる低級な宗教そのものではないのである。

然にもかゝわらず、之等に對する世間の批難は決して一朝一夕にして始まつたものではない、而も夫れは佛敎信者といはれる多くの自力聖道の人からは勿論、その他他力宗門の信者といはれる人々の間にさへ、己に往々にして此の難を受けたのである。從て未だ佛敎の何物たるかも解せず、只徒らに念佛行者の一面のみを見て、一概に此の難を起すものゝあるといふことは又止むを得ない處である。

乍然之等は未だ如來の大慈も知らない哀れな人々の批難に過ぎないものであるが、之等の批難に對する古人の辯明も亦靜かに思へばあきたらぬものが多いのである。曰、「自分はそれが何の爲めの救ひであるか、又何の理由あつての本願であるか少しも知らない。只如何なる愚かなるものも又如何なる罪深きものも唯稱名の一行で往生ができるとの佛典の敎へ並に宗祖の敎へを信するばかりである」と。而

て佛典並に宗祖の法語に批難なご加へんとする人々に對しては吾々如きが佛典の聖意を批難し、宗祖の法語を疑ふ如きは自分を佛陀や宗祖の上にもおかんとするものであつて、それは餘りに恐るべき越權の事である」云。

乍然今日の時代は己に之だけの辯明を聞いて満足するの時代ではなくなつた。何となれば若それが其の宗門に屬する人々か或は其の經典並に其の宗の祖師の法語を絶對にそのまゝ信傳せられる人でない限り果して夫れが私共の眞に信するに足るべきものであるかどうかは容易に定むることができないからである。まして其の教へが現代の思潮と合はず反て其の信條が現代の思想に相反するやの疑ひさへある時に於て、之を釋尊の教へであるとか祖師の法語であるとの理由を以て一般の人々に之を首肯せしむることはできないからである。尙之を詳言すればたゞ其の教へが釋尊の教へであるといつても其の教へが果して萬古不易の眞理であるかどうかは釋尊その人が萬古不易の眞理宣傳者であるかどうかが定まらない限りどうして之をさうだと定むることができるのであるか、而て又釋尊その人を萬古不易の眞理の宣傳者であるといふことを何によつて定むるのであるか、自ら萬古不易の眞理の體驗者でない限り此の問題は到底解決することのできないものである。而もよし、それが萬古不易の眞理であつたとしても、果して今日まで其の説がまぢがなくなり經典に傳へられてゐるかどうか、己に其の經典に於て幾多の誤譯が發見せられ、又幾多後世の擬作が見出された今日、さうして又同一文の文句に於て幾通りにも違つた意味に解せられるものさへあるに於て、吾人は其の何れを取るが最も正しいかは充分に考察すべき餘地ある時に於て、只單にそれが佛説であるとか、祖師の法説であるとかの理由を以て凡ての之等を打捨てやう

とすることは、果して之等に對する親切な答へであらうか。而もそれがたゞ一種の淨土教に對する偏見から云へば云へば深く一種の念佛に對する反感をさへ懷き、且又念佛稱名の一行を以て如何なる罪惡深重の凡失と雖も直に淨土に往生するといふが如きは世間の道德の上から見るも、又佛教本來の道德的立場から見ても、決して眞の佛教でないといふへ誤解せられてゐる人々に對して、たゞそれが佛典にあるとか祖師の法語にあるとかこの理由のみを以て之に答へるといふことは決して賢い答辯の方法ではないのである。而もそれがまた他宗他派の人々に對する質問に對してならば其の質問を打切る爲めとして、ならばまだしも夫れが自分自身に於ける以上の疑問であつた、場合、吾人は何として之が解答を求めやうとするのであるか。そこには全人格の満足として現に信せざらんと欲するも信せざるを得ないところのものとして吾人の信念となるものを吾人は求めて止まないものである。從てそこには寸毫の疑惑もないほどに自己の衷心の要求としてあくまで眞實の道理を辿り、あくまで情意の満足を充實することの稱名念佛でなければならぬのである。

然ば世に何が故にかゝる誤解が念佛稱名に對して起つて來たのであらうか、而て念佛の眞髓佛教の本質は何處にあるか吾人は之より其の根本々質に向つて念佛に對する第一の疑難を解決せなければならぬと思ふ。而てその第一の疑難は念佛稱名によつて吾人の爲せる罪惡が消滅すると云ふ點とそれでは又世間の道德的觀念と一致せないとの批難に就てである。

乍然この疑難は未だ全く稱名念佛が如何なるものであるかを知らない所からして來るとこの一つの誤解であつて、念佛の何ものであるかを了解するに從つて之等の疑難は自ら氷解するものである。而て

此の第一の疑難は稱名と滅罪との關係であるが、何が故に只單に念佛申した丈で罪が滅するものであるか、念佛とはかはごまでも滅罪の功德があるものであるか、念佛とは只單に佛の名號に過ぎないではないか、そして只單に佛の名を稱するのみで其の人の生死の罪まで除くとはどうしても信せられないことである、否それは信せられないところかそれは全くの別時意として如來が衆生への結縁に過ぎないものであるとさへするのである。乍然靜に此の單稱の意味を考ふるに恐らくは此の信者と難者との間に於て單稱といふ意味を全く異にしてゐるやうである。否時には自ら念佛の信者なりと思ひ乍ら此の單稱の意味をとりちがへて反つて宇宙の大道、佛教の中心を脱してゐる人さへ往々にして見受くるのである。然らば單稱の念佛とは如何なる念佛であるかといふに、夫れは同時に稱名の念佛であり、本願の念佛であり、三心具足の念佛であらねばならぬことを知るべきである。然るを世人は單稱とさへさげばそれが直に只單に口先きで南無阿彌陀佛と申しさへすればよいものかの如くに考へ違ひして、其の申す人の心の方ではごんなことを考へていてもよいかの如くに考へてゐる。例へば南無阿彌陀佛と口で申しさへすればよ心では佛を信せずとも又佛にたよらすとも、又佛のごまごまと思はずとも、とにかく念佛申さすればよいかの如くに考へてゐる、だからしてそんな口先き許りの稱名でいくら念佛しても何の効があるものか、況んやそんなことで自分の造つた生死の罪が滅することゝはもつての外のことである。従つて其のやうな滅罪の道理なきあらうわけはないのである。

乍然如何に淨土教が愚かなる宗教であるとしたところで、以上述べたやうな意味での淨土教の念佛であるならば夫れはあまりに人を愚にした所の念佛といはねばならぬ。乍然、幸にも我が淨土教の念佛は

さうした意味での念佛ではないのである。而て單稱の念佛が如何なる意味での單稱であるかは今少しく稱名念佛の眞義を伺へば自から判明する明かとなることである。而て支那の善導大師は釋尊の教説として念佛には必ず三心を具すべきであることを極説せられ、若し三心の中一心も少いでは決して往生することはできない、例令寒中汗を流して晝夜一劫するもそれは悉く無駄であると云はれてをる。又之を法然上人の教へに見るも同様である。然ば只單に念佛と云ふももとより三心具足の念佛即ち三心の確に具したる稱名念佛であらねばならぬことは之を以ても知るべきである。然らば論者は此の三心の具したる念佛であることが淨土教の念佛であり、往生の業因たる念佛であり、又滅罪のできる念佛であるといふことを知つての批難であつたであらうか。然り而て、古來淨土教の先徳が如何に此の念佛に就て詳しく三心の説明を考究せられてゐるか云ふことは少しく眞面目に眞實淨土の念佛に入らんとする人々の常に承知するところであらう。而て此の三心の具不具は直に其の念佛をして。如來の本願に叶ふか否かを定むる所のものであつて、之が又直に其の念佛をして眞實の宗教たらしむるか否かに關するものである、換言すれば稱名の念佛とは即ち三心具足の稱名念佛のことである。

然に三心具足の念佛は必ずしも三心の説明を知らねばならぬといふのではないのであつて、それは如何なる罪人も、或は如何なる愚人にもひたすら如來の御名を稱へて救いを求むれば自ら三心は具はるものであるのであつて、之こそ賢と不賢とを論せず、學と無學とを問はず、又持戒と破戒とを云はずして一切の衆生が悉く三心具足の念佛となるのである。換言すれば三心具足の念佛とは即ち歸命本願の稱名念佛である、言換ゆれば至心に如來を信仰し、愛樂して、彼の國に生れたいとの心から南無阿彌陀佛と

如來にすがる念佛である。否、眞に往生がしたいなら、ひたすら救け玉へと如來にすがればよいのである。而て此のすがる心の如來に向つて通ふ姿が即ち聲に出ては稱名となり、其の心の内容を調ふれば圓かに三心は具備せられてゐるのである。而て三心とは一には至誠心、二には深心、三には回向發願心と此の三つを云ふのであるが、つまり之をやさしくいへば至誠心とはまごころといふことである、つまり偽らぬ心、うそのない心を云ふのである。而て深心とは深く信するの心と善導大師は解釋せられてゐる。如來の大悲は我等如きの罪人も必ず御すがりさへすれば御救け下さると深く信するの心である。而て、第三の回向發願心と云ふことは自分の身と心とを如來の方に差し向けて彼の國に往生したいとの心である。而て、此の三心の具した心で如來の御名を稱するのが三心具足の念佛といふことになるのである。乍然南無といふことは歸命といふことであり、此の歸命の中には又自から發願回向の義が具はつてゐるのであるから、佛に南無すること即ち如來に歸命する心からして、如來よぞ佛の御名を稱へることは自ら願行具足の念佛即ち三心具足の念佛となるのである。言がゆれば如來よぞぞ如來に向つて南無すること即ち如來に歸命するといふ事實の念佛は直に聲に發しては南無阿彌陀佛と稱へることになるのである、心の方ではどうぞ如來よ助け玉へといふことになるのである。換言すれば南無阿彌陀佛とは吾人が如來に南無した姿であつて、如來に衆生が歸命した當體である。從て聖道自力の法門と雖も結局は衆生が如來に歸命し終るより外には何等の道もないのである。凡そ佛敎に於て難行といひ苦行といふことは何を意味するものであるか、稀も釋尊成道の當體を見よ彼は決して難行苦行によつて成道したのではない、否寧ろ彼は六年の苦行も其の効なきを悟て一朝にし

て之を捨てたではないか、而も彼の解脱は何によつてせられたか、彼は只何等の努力をも要せずして、自然に自己本來の自性をして宇宙唯一の絶對なる如來に南無し終つた處にある。換言すれば彼釋尊の成道は眞に南無佛の一念にある。されば難行や苦行が決して成道の正因でないことは明かである。否現に彼は其の難行苦行の無意義なるを悟つて之を悉く捨てたのであつた。

之に反して念佛は安樂の法門である。如來に對する、絶對歸依の念佛である。故に至心信樂の念佛であり、至心欲生の念佛である。そこには一切の苦難を離れ、そこには無限の慈光輝く。歎び無からんと欲するも無き能はずである。

加之、持戒の一心も靜に考ふればこの念佛の一心からこそ起る、念佛を離れては持戒も禪定も成り得るものではない。戒定ならずして眞實の慧は開けない、されば聖道の三學も要するに念佛を離れては決して成りうるものではない。然に念佛は南無佛であり、南無佛は歸依佛であり、歸依佛は即ち佛敎の根本である。然ば念佛は佛敎の根本生命ではないか。釋尊已に然り、我等亦然らざるやである。換言すれば此の南無佛の當體こそ初めて眞に吾人が如來に歸依するの姿であつて、此の歸依佛、即ち南無佛の無き所、何を中心とし生命として三學を成せんとするのであるか、若し佛敎にして南無佛を離れて三學を修するならばそれは全く外道の佛敎である。

然に世人往々にして三學を尊ぶにもかゝらず未だ眞に如來に南無することを知らず、徒らに戒定慧などの三學に迷ふ、寧ろ哀れむべきの極みである。然に一度我等如來の本願をきいて、至心に如來に歸命し奉れば、如來に南無する一心は如來を不離なる妙境に超達す、而て此の心より出るところの生活は

自ら如來の聖旨を心とし、三業自ら佛作佛行の姿ともなつて來るのである。然ば果して難者の言ふが如きの念佛の缺陷にありや、念佛は實に究竟大乘の妙諦、最勝一乘の宗教であるといはねばならぬ。従て又如何なる愚人も罪人も如來大悲の本願なれば等しく念佛一行に託乘せられて其の罪障の消滅する所以も亦自ら判るべきである。

而も吾人は只念佛して彌陀に救はれ罪の責任を免かれやうとするものではない、否寧ろ眞に眞實の人生に生きやうと思へばこそ、無限大悲の如來にも歸するなれ、決して善事を無視して念佛に誇る者ではない。只だ理想高くして實力無きを如何にせんやである。自己の本心は絶對を望む、釋迦何人ぞと謂度い處である。乍然之を世尊の行動に顧み、之を孔子キリストの大神に鑑み來たる時、轉々吾人の力足らざるを感せずにはゐられない。永遠の生命と無限の向上とに如何に彼等が献身であられしことよ、神の如くに活き、否神としてまで活たる彼等の生活は即ちそのまゝが神人の生活である。法然上人が自を十惡の法然房五逆の法然房と歎かれたのも神に生きんとする眞人の叫びではないか、理想なき人には罪惡の感じはない。如來に生きずして何の理想ぞや、如來を知らずして何の生命ぞや、我等は眞人の生活に生く、一切は如來を中心とし、一切は如來を根本とする。如來の外に吾等の歸一すべき所はない。如來は我等の本源である。されば如來に歸るは即ち又自己そのものに歸るのである。

一切の道德も、倫理も科學も哲學も、如來を離れては無いのである。如來は一切の本源である。而て念佛は之に歸するの初めであり又終りである。そこには一切が許され、一切が安らぐ、善人も惡人も如來の御前には一子である。まして自らよからんと欲してもよくなる能はず、深く其の罪を悔いて如來無限の大悲に歸るそれが何で悪いであらう。否それこそ反て世間の道理にも叶ふではないか。況して一切の善事も之により始まり、一切の惡事も之よりぞ止む。念佛は正にこれ眞生の第一義でないか。

(二四、二、二九)

## 懺悔錄

(廿一)

演 阿彌

法身にして而かも報身なる如來様よ。大きな望みを持つていそいと越路の旅に出た私は途中上人と同車する事を得て共々に信仰を語らひ乍ら北へ北へと此肉團を運ばしめるのでありました。

其後上人とは暫く打絶てて居りましたが何時も變らぬ温き謙讓の徳化に云ひ知れぬ友情を感せず輩として畏敬せざるを得ない私は誠に弟として否な後輩としての感情の上に一層の親しさを覺ゆるので御座います。上人も亦た親しき御心を以て私を慈しんで下さいました。それで汽車の中でも其後に於ける私の信仰に就て御尋ね下さいました。實際また友の消息を尋ぬるのも本當になつかしさを増す物でも御座います。私は唯だ重なる稱名實感に就てかいつまんで御話し申し上げました。すると上人は「夫は法身を見たのですね。」と仰いました。此時です。誠に此御言葉に依つて或るハッ

キリした佛身觀が私の心の上にとらめいたのは。噫。今でも一種の淡い感激を覺わます。夫は此御言葉を承らない以前には全く私の佛身觀はボンヤリして居つて法身と云ふのは唯だ理屈の上丈の事であり、而かも唯だ理智満足の道具として考へられた物だ位にしか思つて居りませんでした。而して信仰の對象としては全く報身の如來様であるので三身即一など云ふ者は論理の結果に過ぎないのだ。事實法身と云ふ時には報身と考への中に入れないし、報身を云ふ時には法身はのけて考へられるので法身としての考への中には信仰の對象としての要素が直觀的に含まれては居ないと思ひ込んで居つたのでしたが、此御言葉を承つた一刹那に法身と報身とが（而して報身の中に應身が）ピタツと一つになつて直觀せられたので御座います。理屈なしに法身即報身であります。モウ私には報身の本源が法身でもなく法身の顯現が報身でもなく私の信仰の對象如來は「法身即報身」の如來様であります。だから法身だと云はれても左様です。どうなづかれるし報身だと云つても全く其通りで

すども思はれますのであります。もう此の信仰感情の前には理屈を超越して唯だ一體の如來様なのであります。唯だ説明をせねばならぬ場合には是非共概念的に法身とか報身とか區別して言はねばならない丈なのであります。然し夫は直觀の如來様を何とか彼さか云つて見るのに過ぎないのであります。之は誠に思ひがけない事でありました。本當にS上人には以前から我儘も申上げて色々御恩になつて居ります。何時かは御報恩申上げる事の出來る機もありません。何時は御報恩申上げる事の出來る機もありません。偕て私達は黎明朝無事に越路のN市に着きました。G寺で五重再傳會が念佛に依つて催されるのであります。御聖人は私達よりも餘程遅れて御香の事で御飯の御饗應を受けて色々御話を承つて居る内に時間が参りました。S上人と私は門外の堀端に出て信仰談を交はし乍ら御待受け致しました。やがて橋の方遙かに五六臺の人力車が見え初めました。眞中に聖人様がいらつしやいます。おゝ其御顔の殊に麗はしかりしよ。否な殊に麗はしく拜し得たる我心の如何に嬉れしかりしよ。又更らに今日から廿

日餘りも朝に夕に聖教を受くるかと思へば胸轟き涙にじみて「我が佛よ。嗚呼我が世尊よ。」と叫べば叫びたい程に覺くも亦た嬉れしう御座いました。近くなる儘にニコリと笑みて御會釋下さいました。お聖人の御顔の興奮せる如く少し紅を帯びて麗はしく晴れ晴れしく見せ給ふ事のごんごんに例へ様なき迄になつかしう御座いましたでせうか。本當に本當に今思ひ出しても喜びの心が湧き出でます。一同は本堂に入つて靜かに稱名し庫裡に下がつて御挨拶がありました。私は今日より暫く御跡に隨つて御教を乞ひたく涙ぐましくも御願ひ致しますと恐ろしき迄にソツカリした御口調で御許しの御言葉がありました。こんなに恐れれ響きを私の耳の根の心に感じた事は未だ嘗て経験した事が御座いません。噫。御聖人様は森嚴で而かも平濶でゐられれます。私は希望に輝く心の嬉れしさを隠す事が出来ません。喜びは念佛となり願ひは稱名となつて祈りの心のますます深くなり行くのを感せずには居られませんでした。こちらの奥様も信仰の深い本當に好きな方で御座いま

す。而して奥様の發起で朝は四時から有志の者丈で御念佛させて頂く事が出来たのも本當に嬉しう御座いました。夜分は醫專の方達の爲めにS上人の「眞我の實地認識」と云ふのと御聖人様の「人生の歸趣」と云ふのとが講演されました。御聖人様のは信仰に依つて至善に到達し至美の人格を完成して以て一切と共に理想の國を建設せん事を三段に分つて私達の上に宗教の本義と其本尊と及び個性の伏能と其開發とに就て御力説下さいました。御話に感激した醫專の方達は終に毎朝の念佛の仲間に入つて仕舞ましたので御座います。嗚呼實に聖者の感化の偉大なるに驚歎せざるを得ません。S上人の御話は十數年の御研究に成るもので前にも承つた事のある眞如の理に目醒めしめんとする御苦心なのであります。判つた様で判る事の難い全くむづかしい御話でありました。五日目の午前で御座います。私は其話に關して唯だ獨り靜かに冥想して居りますと不圖御話の中の覺明と云ふ事がハツキリ心に浮かんで参りました。私達の知つて居る宇宙は宇宙有りの儘の眞實眞天

に非らずして唯だ自己の感じてゐる自己感念中の宇宙に過ぎないから所謂唯心所造の假相である。此故に私達の心作用である所の五感等が宇宙の森羅萬象に見聞き觸るゝ刹那の純粹經驗の端的には私達とソレゾレ見聞觸の一々の對象とは不可分の絶對的關係になつて居る。(此翌年西田博士の善の研究を読んで私の思つて居つた事を裏書された様な氣がして大變嬉しかつた事を覺て居ります)。否な關係でなく全く其物になり切つた状態に置かれて居る。然るに其不可分の夫が我と彼と別なる如く現に感じつゝある此の觀念は一體如何した譯からであらう。色夫自らが私であり聲夫れ自らが私である可きものを小肉團の上に現はるゝ我執と云ふ唯つた一つの小さな眼が出来た爲めにかくの如き彼我分別を來たしてゐるのではなからうか。私は佛敎の學問もせず哲學も學んだ事がなから學説に會ふか會はないか知らないが、此のたつた一つのやくざな眼が私達の根本的病源であり而して此眼の爲めに眞實の眼が暗らまされて居るから無明と云ふ根本煩惱が形作られて居るので



あらう。此故に一度之が破れて一々の色受等が直に私自らとなつた時、云ひ換へれば見聞の夫々が私と不可分の渾一態として直觀せられる處が即ち本然自性の覺明なのであらう。此故に此夜明けが體験せらるゝ時、一として執す可き法なく著す可き事は無い。誠に萬法に於て滯らず萬物に於て障らず眞如隨縁の假象其儘が私と云ふ物の心なので現に區別して考へられてゐる私の心もまた私の身體の外に見聞く處の萬象も畢竟は本當の私に即したる影法師なのではあるまいか。」と云ひ現はし方が拙でありますけれどもこんな意味の事をS上人に申上げて見ました。すると「その通りです、之を殻を破つて出たとも云つて居ます」と仰しやつて下さいました。此小悟は當時一分愉快な氣持を私に與へましたので直様御聖人様に御尋ね致しました處「夫でよう御座います」と一分御許し下さいました。是は白隱の「十方を目前に銷融し三世を一念に貫通する」と云ふ處かも知れませんが然し乍ら今私の見聞覺知が直に覺明として、私に直觀され而して其融合が日常に感せられて居るので

### 否定の眞理 (一)

中野善英

古釘を抜くときには頭を一つコツンと叩いて打込んで置いてからさてギユツと上へ引抜く、イエスは十字架を作りて我れに従へど常に教へられたフランシスも其來る者に先づ爾の物を悉く願ち與へて而て後に従へど云つてゐる、捨てる事は得る事であり、一度捨てた者でなくては本當に持つ事は出來ぬ。「大死一番」する處に更生が躍如し、眞に死んだ者のみが往生を得るのである。佛教はよく死を云ふ、而し本當に死んだ者のみが生を得る死者のみが救はれるのが宗教である。

刃を鍛へるのには火で焼いてナマクラにしナマクラにして、飴の様に延ばしてから本物になるのである、一度否定の洗禮を受けぬと本當の肯定は出て來ぬ、それを安價に現實を肯定して自由主義自我主義に奔るのは嚴正なる自己批判、人生批判

はありません。唯だ私が融合を念佛の中に見出した其經驗から類推したのに過ぎませんので今は唯だ概念であり理解である丈なのであります。是が概念でなく直觀の事實として感せられなければならぬと思つて居ります。さるにても私の信念の遅々として進まぬ事は本當に悲しい事です。本當に此事斗りが痛切なる祈りとして忘らるゝ暇もありません。御聖人様が私の洩らす吐息に御同情下さいまして「本當に熱心だ」と云つて下さつた時、全身に汗を感じ顔が眞赤になつて眞實に恥かしさを感せずには居られませんでした。何と云はれたとて喜べない哀れな私！。如來様の御慈悲が何時になつたら如實に強く深く感じられるのでありませう。戀こそ増され。祈りこそ増され。心からなる喜びはまだまだ私の上には惠まれて居りません。本當に哀れなる私！。(續)

前回ノ重ナル正誤

- 一〇頁上四遺蹟遺蹟一一頁上一九非されば非ざる
- 一〇頁下三同 同 一一頁下一一舞相 無相
- 一二頁上七正等正當一三頁上一三缺點 此點

が足りないからだ、我々とても不健全な否定主義や隱遁主義を善しとするものではなく、全く全肯定の解脱境を理想とする者ではあるが、其前に此峻嚴なる否定の時を一度越さねばならぬ。身も世も無く一切から見限られた者でなくては本當の教に這入れぬ、絶對救済は叫ばれぬのである。西方の淨土は行き易うして其人なしと歎せられたのは其故である。

今迄の佛教も道徳も多くは否定主義禁欲主義であつた、而しそれは右へ傾いてゐた船を左へ傾かせやうとしたに過ぎぬ、餘りに薄片く肯定して來たのを見て左傾に出すには居れなかつたのである。厭世に非ずして實は欣淨、否定に非ずして實は大肯定であつた。否定を要しない者には肯定はなく肯定ほど積極は無く、否定は實に本肯定である。一切を否定し盡す程大きい權威があらうか、其否定に由て始て絶對肯定が將來せらるるのである。八不の否定に出て一實中道を顯彰し、所欲に従て不踰矩の大道を體得するのが正道であり、理想で

ある。元來東洋の思想、哲學、道德は此否定に即して中道を主張せやうとする行き方で、其代表的なものが佛教である。

宗教が死と絡まつてゐるのは此否定を超越せんが爲めである。死を決した心中者ほど生の悦びを感じてゐる者は無い、其時には死を喜んで居るものでも無ければ死を高調し死を讚嘆してゐるのではない。實に生の大肯定者である。甦つてゐる者である。死を云て死に墮するものは死の道でない。否定を云て單なる否定に終るものは眞の否定でない、眞に死した者のみが入る極樂であり、救済であるとの謂もそれである。それでは眞に死ぬることは何うする事か、それは舊き自己に死し、現實を破つて理想化に生きる事である。

### 往生の意味に就て

小要利吉

往生とは自己の心が佛の聖意に合一するまでの道程といふ意味なり。

往生とは人間自然の垢質を除去し純淨無垢なる行爲の體現と云ふ意味なり。  
往生とは極めて善き方面に向つて進み行くこと云ふ意味なり。

往生とは増益向上發展し最高絶對の妙境に入ること云ふ意味なり。

往生とは心神が永久に眞實に生きること云ふ意味なり。

往生とは純淨なる生活に働き未來永遠に之を増進して行くこと云ふ意味なり。

往生とは生存中に純淨無垢の身となり靈の生活に變ること云ふ意味なり。

往生とは人生終局の目的如來の光明の眞理に歸趣すること云ふ意味なり。

往生とは心の改造精神の更生と云ふ意味なり、往生とは汚濁の心が清淨の心に轉すること云ふ意味なり。

以上は小要氏の自ら得られたところの稱名實感の記録です。佛に示されたものですが、道友と共に其の往生の眞義を味はし度い、私が勝手に云に載せさせていたたく事にしたので、其のつもりで讀んで下さい。(念)

### 法の道

念阿彌

ものとして、ニコニコしてゐた時である。されば只ニコニコし乍ら

或る人が私に「宗教生活は有代もあつた、乍然今日の私は如來の慈光を喜ぶのみにて、何等難いものはないですわね」とニコニコのやるせない御心を想ふと自分の積極的慈光宣傳にも出で得ない、コした顔で言かけた。

そこで、私は「有難いどころでる位になつた。それは餘りに安値の大道を眞劍に體驗して眞實の人生に生きんと悩む者を尊いと思ふ

ですか、寧私には苦しい生活のやうなニコニコだからである。生に生きんと悩む者を尊いと思ふ

であります」と答へてやつた。さ 釋迦や孔子の生涯、殊にキリス 今や徒に大悲をのみ喜ぶの時代

うしたら其人はヘンナ顔して「何トの十字架を想ふ時、如何に彼等は過ぎた、而て少くとも如來の大

故です」と尋ねた。私は宗教生活が自分の事を打捨て、衆生救済に悲を體して少しでも如來の聖旨に

が全々有難くないと言ふのではな 献身であられたかを感せずにはゐ 叶ふべく、眞實の大道に立つべき

い、乍然ともすれば未だ眞實の宗 られない。而て如何に彼等が眞劍の時である。而てそこには無限の

教も知らず従つて眞實の信仰もあ であられしことよ、彼等の献身的 望みと喜びと力とが全身の中に漲

り得ずして、非人格な人々が信者 風貌の中には私共のやうなそんな つて行くのである。有難どころの

三昧會延期謹告

毎年四月上旬當山に於ける  
念佛三昧會は導師の止むな  
き都合にて、今秋に延期い  
たしましたから何分とも左  
様不惡御了承の程願上ます。

岐阜城山 行基寺

◎誌料未納の方へ謹告

「眞生」も道友の御後援によつて  
どもかく今日まで生長して來た  
ことを心から感謝いたします。  
乍然今日の處誌料未納の方も可  
なり多いため、社の方でも資金  
に困ることも少くありません。  
ついては無理にとは申しませ  
んが成べく速く御拂込みのほご願  
上ます。

「眞生」が今後とも永く存続する  
かごうかは一に皆様の心一にあ  
ることです、願くば右御後援の  
ほご御祈り申上ます。

眞生社同人

寄贈並誌代拂込芳名

△寄贈之部

○金貳拾圓岐阜行基寺様 ○金五  
圓大阪貞松院様 五井とよ子様  
眞土なか子様 川村二郎様 清  
水村辨康様 久我尾正治様  
内田忠平様

△誌代之部

○金八圓渡邊眞戒様坂内參圓渡  
邊眞戒様 貳圓黒岡仁太郎様  
壹圓竹内倉吉様 野村佐一郎様  
小川廣雄様 ○金貳圓中井常次郎  
様 丸地辨信様 高宮淨安寺様  
川村二郎様 加藤齋一郎様 加

藤彌三松様 岡田橋太郎様 水  
野福松様 中村禪定様 佐原眞  
様 奥津喬治郎様 渡邊庄輔様  
○金壹圓神谷善之進様 瀬戸嘉  
市様 仙崎町極樂寺様 植野久  
一様 久保田領太郎様 古川眞  
祥様 板津助右衛門様 上條克  
己様 伊藤のぶる様 中川茂市  
様 八鳥七郎治様 上條次郎様  
堀作兵衛様 龜田松太郎様 岸  
田久藏様 服部うた子様 遠藤  
フジエ様 矢部モト様 大草ト  
シ様

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土屋 觀 道  
發行所 眞生社  
東京市芝公園第十四號九番  
印刷所 三井 清 次  
東京市芝區三田四丁目番地三號  
印刷所 玄々堂 印刷所